

理由はただ一つなんですよ。「プロにはいつて契約金で家庭を救いたい、救わなければいけない。」この一心だったです。高校三年の時からすでに。で当時今でも頭に焼きついてますけれども、早稲田大学から非常に強い勧誘をうけてね。以前、日石カルテックスというノンプロの監督だった北崎さんという方が、夏休みに熊本商業のコーチにいられたんですが、この方を通して早稲田の方でなんとしても入学してほしいとね。しかし私の家は貧乏で、とてもじゃないが大学どころではないということですね。

ノンプロ時代

私は、極端な言い方をすれば、高校三年の時は、授業道具は全部放っぽり出して野球ばかりやっていました。それで卒業する前に阪神タイガースから契約金三十万円できましたけれど、それではあまりにもいかにということ、日鉄二瀬の試験をうけました。ここは九州のノンプロ界では一番強かったんです。

しかし、日鉄二瀬の新規採用者はすでに六人決まっていたんですよ。その頃は炭鉱が不景気になる時期でもあったんです。

野球でメシを食おうと思ってる私にとって、日鉄二瀬に入社できないことは死にも等しいことだったんです。それで私は一生けん命頼みまして、テスト生とす。

た、負けた、また明日あるバイ」という繰り返しでは、ファンの人たちは見ていておもしろくない。そしてまた新聞が拡大して記事を書きますからね。

それから、プロとなると各々が独立性をもった集団ですから、俗にいうチームワークというのは、よく誤解されるわけなんです。仲良くやろうとか、ムードをよくしようとか。

しかしね、そうしますと試合には勝てませんよ。一定の期間はいいでしょう。私の経験からいいますと、集団の場合には、皆んなが仲良かったら勝負は勝てません。

どういうことかという、一人の選手が失敗しますと、仲が良すぎると慰めまですでしよう、慰められた選手は、しまったと思っても反省の度合いが非常に少ない。しかし我々プロの場合は、仲間が失敗すると「この野郎、なんであんなプレーするのや」とけなされ、非難され、マスコミにたたかれますわね。そうすると、その選手は二度とこのようなプレーはしたくないという気持ちが強くなり、さらに腕を磨きますわね。そこにいいところがあるんです。

こういう者の集まりが江藤流に言わせるとプロの集団であると、従って失敗は二度と許されないと。

だから仲の悪い者同志、くせのある者同志が集まって力を出し合ったら、それ以上強いものはないというのが私の考え

して腕だけは見てくれるということになりました。それから「濃人学校」でテスト生として十日間を過ぎた後、臨時雇として採用されたんです。

日鉄二瀬の野球部合宿に入った私は、濃人監督から「三年やってプロに行けなかったら、もうプロは諦めろ」と言われ、濃人さんの猛烈なシゴキに必死に向かっていたんです。「三年たったらバット一本でメシの食えるプロになるんだ」と思いながら猛烈なシゴキに歯を食いしばって耐えました。

私は日鉄二瀬を退社するまでの三年間ずっと臨時雇、補欠だったんですよ。

日雇いですからね、日給が二百七十三円、野球部手当が千円、だから一カ月の給料は九千円位ですよ。私はそれを全部おふくろに送りました。

三年間、小遣いはゼロでいったんです。それで母親の内職と父のサラリー、それに私の仕送りで一家の生活を支えていましたから、今の高校出とは、ちょっとわけが違うんですよ。本当に生きていくということについて、肌で感じながら青春時代を過ごしたんですから。

プロ入団

日鉄二瀬から中ドラゴンズに入団しました。昭和三十四年です。自分の計画どおりにプロには入れたわけです。どうして中日に入団したかという、当時、中日、大毎、南海、広島、阪神、東映、

方です。

技術というのは、練習さえすれば、誰でもある程度は上達するんですよ。だけど物の考え方というのは環境によって非常に左右されますからね。だからプロに徹しろといっても、本人が自分の環境、「俺はこれしか飯が食えんのか」と腹を決めてかかるのと、そうでないのでは、技術的にもえらい差がでますよ。一つのプレーに対して非常に執念深くなりませんか。

野球教室

私は、中日ドラゴンズに在籍していた頃から、シーズンオフには必ず恵まれた子供たちの施設を回って歩きました。そして、その頃から、現役を退いたら恵まれない子供たちに希望と勇気を与える仕事をしたいと思っていたんです。それで日本青少年野球育成会を設立しました。

全国の恵まれない子供たちに無料で野球を教え、野球によってたくましい青少年を育成しようというもので、青少年に正しい野球技術、どんな時でも耐えることができる強い精神力を身につけてもらおうと、今、全国各地で「野球教室」を開いております。

野球しかできない男が、野球によって少しでも、団体行動のよさ、規律を守るよさとかを教え、また精神面でも、もう少し強くしてやらないと、彼らが大人に

西鉄といったチームから誘いがあったんですが、中日が一番契約金が高かったんですよ。それで中日にはいったんです。私は入団してからずっと第一線で、引退するまで二軍の経験はなかったんです。打率も一年一年よくなっていったんですが、入団当時、阪神の村山、大洋の桑田、国鉄の北川、それに巨人の伊藤らと新人王を争いましてね、結局桑田にもついていかれたんですが。その翌年から打率も安定してきました、はじめて三割を打ったのが、昭和三十九年、オリンピックの年でした。三割二分三厘で首位打者になりました。そして翌四十年には、三割三分六厘で二年連続で首位打者になったんです。

我々はプロだという誇りは絶対なものですよ。私が今、青少年を育成しているのも、青少年にプライドがないからです。あっても非常に薄い。我々の練習というのはね、人間がこれ以上体力的、精神的に練習できないところからはいるのがプロの練習なんです。それまではおけいこなんですよ。

だからアマチュアの人たちが練習しているのは、我々から言わせるとおけいこなんです。我々は二時間でも三時間でも練習して、はいつくばって、ヘド吐いて、もうこれ以上練習できんところから練習するんです。そうしますとね、体が覚えてくれるんですよ。体が自然と。だから体で覚えさせないとやはり

なった時、本当に日本人としての価値がなくなってしまうよ。

こういう私の考えに、基本的な賛同者は一〇〇パーセントいまして、色々な問題はあつたんですけど、それでも苦労してがんばっているんですがね。

私は、警察友の会の会員なんです。もう十七年間行動していますよ。

私は、戦争は絶対あってはいけないと思います。青少年育成のため、今やるべきことは徴兵制度のような厳しい規律のもとで一定期間教育することですよ。もうこれ以外ありません。こんなに乱れてきては、それ位やらないとだめですよ。

それに今の父兄だって、戦後の高度経済成長期に青春時代を育った人たちですよ。全然考え方が違ってあるんですよ。物を与えればそれでいいと思ってるんですからね。国の方向づけというの、スポーツに頼らざるを得ないということも情けないことなんです。

今、私が企画しているのは、最後の楽園といわれるミクロネシアに、少年たちをたくさんつれて行き、「自然と野球と勉強」といったテーマで壮大な計画を練っているんですよ。それから私は、アメリカに多くの野球の友だちがおりますので、日米対抗の少年野球も計画しているんですよ。

もつと積極性を

熊本県人というのは東京にも多いです

一線級にはなれませんが、もうこれ以上やったら死んでしまうという気持ちになって五分、十分、三十分、一時間と続けるのが我々の練習なんです。

意識朦朧でも、球がくると体が動くんですわ。それが自然に動くから結局体が覚えてくれるんですよ。

その練習を私は、ノンプロの時にやってきたものですから、プロにはいつてからは楽でした。

我々のプロというのは、チームという一つの集団ですけどね、それぞれが独立性をもった集団なんです。その独立性というのは何かということ、同じユニフォームを着ても月給が違うわけですよ。そこに争いがあるわけですね。ライバル同志の争いが。その争いが、要するにグラウンドで、いいプレーとなって表われてくるのが一番理想的なんです。

プロの集団

私は今のプロ野球の運営、チームづくりに非常に不満もっている一人なんです。

それでなかなかユニフォームを着らんわけです。練習にしても、もつとスパルタ式に鍛えて、少なくとも我々のかけだし時代の気持ちになれば、もつともつとおもしろい野球ができて、もつともつファンが来ますよ。

「今日もプレイボール、さあ終わっ

ね。しかし、どうしても引込み思案ですからね。

井の中の蛙という気がするんですよ。もつともつと視野を広げたらもつと伸びるんじゃないですか。大体熊本県人というのは伸びる要素があるんですよ。非常に人が好いし、まじめだからね。それといざという時にも腰が強いんですよ。

熊本は産業界でなく、観光都市なんだから、どんな積極性がでてくれればと思います。熊本の人たちに強くプライドをもってもらってね、肥後モッコスのプライドをもってもらってですね、どんどんできてもらいたい。熊本県人に積極性が備わればもつと伸びますよ。団結心は強いのですから。

私は九州昭昭和会というのをつくらうと思ってるんですよ。昭和生れの九州人の会をつくらって、熊本から、九州からでてくる人たちの悩みを聞いてやったり、世話をしたりする会をつくらうと思ってるんですよ。熊本県人会があります、あまりこういう活動はやっていないみたいですし、また熊本県人会ではあまりに小さいですからね。

それから私のやっている野球教室を、熊本県でも、どんどん利用して頂きたいと思えますよ。

私は熊本県人という意識は、プロの誇りと一緒に今でももっていますよ。

熊本にもしょっちゅう帰っております。けれど、年々きれいになっていきます。しかし、ふるさとがある、自分の国があるというのは、非常にいいことですよ。